地域文化の発信拠点を目指す図書喫茶

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

いわゆる喫茶店はすっかり減ってしまった。喫茶店はその地域文化を代表する顔の一つでもあった。カフェチェーンがこれに取って代わり、雰囲気も味も画一化は免れず、寂しい限りだ。

筆者の自宅は東京都西東京市にあり、小金井公園の東側、五日市街道のすぐ北にある。五日市街道と並行して玉川上水が流れているが、自宅から200メートルちょっとの玉川上水沿いに「珈琲館　くすの樹」なる青い三角屋根を抱いた結構知られた喫茶店があった。凝った椅子やテーブル、食器などが使われ、ときどきはコンサートも開かれ、また敷地内にある樹齢300年とされる高さ23メートルのクスノキが雰囲気を添える人気の店であった。

店は40年ほど続いたが、一昨年の4月に閉店し、三角屋根も取り壊されてしまった。この後、ここがどのようになるのか皆が注視していたところ、開店したのが大手カフェチェーンのＳＢ。クスノキはそのまま残し、建物も木を多用し、クスノキや玉川上水にある雑木や桜などが見えるようにぐるりとガラス窓にした、ＳＢにしては一味も二味も雰囲気の違った店舗となった。しかし、以前の珈琲館　くすの樹とは大きく異なって機能重視となり、客層もすっかり変わってしまい、若者やビジネスマンが増えて、パソコンを持ち込んで仕事をしている人も多い。

そんな折、武蔵野の雑木林を守る活動に取り組んでいる埼玉県所沢市の友人を訪ねたところ、案内してくれたのが「図書喫茶カンタカ」であった。以前は外食産業の店舗だったものを全面改装したもので、店舗面積は128坪もあり、席数は最大で74席。昨年の12月にオープンした。所沢駅から徒歩で約15分。所沢市と東京都東村山市が境を接する辺りにある。すぐ近くを柳瀬川が流れ、昔、宮崎駿監督の「トトロ」のモデルになったバス停がこの辺にあったとか。そもそも店の名前「カンタカ」は、トトロに登場するカンタ少年と、「もののけ姫」に出てくるアシタカの二つを合成したもののようで、店のコンセプトを自然と人の調和した関係を目指すところに置く。

すなわち、いくつものこだわりを持つ。第一のこだわりはふんだんに使った木で、柳瀬川や雑木林をテーマに、「雑木林にふんわりと包まれたようなほっとする空間」をイメージしてデザインしたそうだ。第二のこだわりが食材と料理。焙煎（ばいせん）したコーヒー豆や狭山茶などの地元の食材を利用し、目玉にしているカレーも当地の有名シェフの監修の下でつくられた味だという。そして第三が最大のこだわりで、壁面に置かれた天井までの高さがある本棚に置かれた膨大な本だ。いずれもオーナーが所蔵するもので、オーナーが強い関心を持つ自然や農業、まちづくり、子どもに関する本が豊富に含まれ、喫茶を利用する人はこれらを読むことができ、今も本を運び入れ続けている。第四のこだわりは、二階が多目的スペースとなっており、多様なワークショップなどを開催し始めていることだ。

本棚に囲まれたカフェ（肥沼位昌氏提供）

このように従来の概念をガラリと変えた喫茶店で、武蔵野の自然・環境を守りながら、喫茶店という空間を、地域文化の発信拠点、地域コミュニティーの中核にしていくことを目指している。筆者の自宅からは電車も使って小1時間。頻繁な利用はかなわないが、ここでの学びや交流の成果を、地元に持ち帰って地域活動に生かしていきたいものだ。図書喫茶カンタカの発展を期待している。